

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 25日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21530918

研究課題名（和文） 自分の成長と家族関係を省察する小中一貫の家庭科授業開発

研究課題名（英文） Home economics lessons and curriculum development from elementary school to junior high school focusing on students' own growth and family relationships

研究代表者

堀内 かおる（HORIUCHI KAORU）

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00252841

研究成果の概要（和文）：

家族の多様化や複雑化が社会問題とされる中、学校においても様々な家庭の背景を背負った子どもたちが学んでいる。家庭科における「家族」についての学習では、自らの家庭生活・家族関係を相対化する視点を身につけることが重要であり、これから自分がどのような「家族」を形成するのかを考える手立てとなるような教材が求められる。そこで本研究では、小学校から中学校まで一貫する家庭科教育における「家族」学習のあり方を検討し、絵本が教材として活用できることを明らかにし、独自のデジタル絵本教材を開発した。

研究成果の概要（英文）：Recently, many students are faced with complicated family relationships. The learning on “families” in contents of home economics education is important for thinking about their own families and imaging the families that they will build. This study tried to develop the teaching materials for learning “families.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：家庭科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：家庭科、小中一貫、授業開発、家族、絵本

1. 研究開始当初の背景

平成20年1月に公表された教育課程審議会答申において、家庭科教育に関しては「自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、生涯の見通しを持って、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成」することが掲げられた。これを受けて、同年3月告示の新学習指導要領では、小学校「家庭」の改善の具体的事項として、中学校の内容との体系化を図り、生涯の家庭生活の基盤となる能力と実践的な態度を育成する視点にたって、内容の再編成が行われている。その一つである

「①家庭生活と家族」の内容については、「家族の一員として成長する自分を自覚し、家庭生活を大切にすることを旨とした学習活動」の充実を図るよう示唆されている。

このたびの学習指導要領改訂で、家庭科教育を通して子どもたちに伝えるように期待されている「家庭生活を大切にすること」という心情が大変重要であることは疑うべくもない。しかし、その「心情を育む」という時に、家庭生活・家族関係についての理想像を子どもたちに示し、そのような家庭生活・家族関係を生きることが困難な子どもたちの学習に向

かおうとする意思と意欲を断ち切ってしまうことがないよう、留意が必要である。今日の学校には、多様な家族関係を生きる子どもたちが多数集まっている。家庭科教育に携わる教師には、家庭生活や家族関係の学習に対する鋭敏な感性と、きめ細やかな指導力が求められている。

酒井(1995)は、家庭科の教科書が伝える家族イメージやジェンダーのメッセージを分析し、その教科書が発行された時代の家族観やジェンダーに関する社会的要請を浮き彫りにした。教科書は、そこで取り上げられている事項に対する知識・理解を促すのみならず、家族のあり方に対する隠れたメッセージを発しているのである。その意味で、教科書をはじめとする各種の教材に関して、そこに描かれている表象や言葉の言外の意味について、授業者は敏感に感じ取る必要があるし、記述内容や教材としての妥当性を吟味して使用しなければならない(酒井はるみ(1995)『教科書が書いた家族と女性の戦後50年』労働教育センター)。

2. 研究の目的

家庭生活や家族関係を取り上げる学習において重要なことは、自分自身のおかれている状況を相対化して見つめなおすための、フィルターとなる教材を提起することである。たとえば望月(2006)は、子育て中の母親たちがメールで情報交換をして育児不安と向き合っている状況を表した映像を高校生たちに見せることを通して、生徒同士の対話を喚起し、現代の育児環境と家族の役割について考えさせる授業を実施している。また西岡(2006)は、親子のかかわりや心情を描写した歌を教材として、中学生たちがこれまでの自分の成長を振り返り、家族が自分に及ぼした影響について考えさせている。これらの実践はいずれも、生徒自身の心情を映し出す鏡としての教材の可能性を示唆している(両実践とも堀内かおる編著(2006)『家庭科再発見』開隆堂所収)。

授業改善に向けてスパイラルに継続するアクション・リサーチは、教師の授業力向上の方法としても近年注目されている。また、ワークショップに代表される参加体験型の学習は、学習者の「気づきから築き」を促す手法として、学校教育への導入が図られており、本研究者もその方法の効果と授業展開についての研究に取り組んできた。ワークショップでは写真や音楽、映像等が適用され、現在、本研究者は絵本と映画に着目し、家族の姿や自己形成、家庭生活にかかわる内容の資料の収集を手掛け始めたところである。

特に絵本に関しては、これまで家庭科教育の保育・家族に関する学習において、生徒自ら作成したり、読み聞かせによる幼児とのふれあい体験などの実践が報告されてきた。芝

らは、広島大学と附属学校との共同研究として家庭科保育教材の開発に取り組み、子どもの文化として絵本が持つ普遍的価値をどのように生徒に理解させるかという課題を基に、授業提案をし、実施・検証を試みている(芝静子ほか(2008)「発展途上国の子どもを理解し共感する家庭科保育領域の教材開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号、11-20)。この研究では、絵本作りの楽しさを生徒たちが実感するように、ぬりえ絵本を用いた製作が行われているが、絵本自体の内容分析や吟味は目的とされていない。

他方、藤田は子ども向けテレビ及び絵本を取り上げ、その内容分析を実施してこれらの媒体に潜むジェンダー・バイアスの存在を指摘している(藤田由美子(2003)「子ども向けマス・メディアに描かれたジェンダー」『九州保健福祉大学紀要』No. 4、259-268)。藤田の指摘にあるように、絵本や映像の教材使用に当たっては、そこに隠れたカリキュラムとして機能するジェンダー・バイアスが存在していないか見取る必要がある。

以上の先行研究の動向を踏まえ、本研究では、新学習指導要領でも強調されている小中一貫の体系的な家庭科教育実践という観点に基づき、家庭生活を大切にできる心情に触れる学習内容で自分の成長発達を省察できる契機となるような教材を使用した授業のあり方について、実証的に検討することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)教材としての絵本の収集と分析：「家族」や身近な他者をテーマとした絵本を収集し、家族関係・人間関係の描写を分析し、家庭科における家族学習の教材としての絵本の可能性について考察する。

(2)小・中学生の絵本読解力と家族描写の受容状況調査：小・中学生が絵本に込められたメッセージをどのように理解しているのか調査し、結果から絵本教材を用いた授業デザイン仮説を提起する。

(3)教員研修における絵本の教材化の試み：教員免許状更新講習、附属小学校での公開セミナー等において絵本を教材とした授業開発演習を行い、教育現場で活用できる授業プランを考案する。

(4)デジタル絵本の製作と授業研究：自分の成長と家族関係のあり方をテーマとしたデジタル絵本を制作し、中学校における授業実践をもとに生徒たちの学びを分析する。

4. 研究成果

(1) 絵本の収集と分析

様々な形の「家族」や自分自身を描いた 100 冊余りの絵本を収集し、保育や家族に関する授業の教材としての絵本の選定に資するための冊子『絵本に描かれた子どもと家族～自分自身・親密な他者とのかかわりを描いた絵本 100 冊の紹介』を作成した。絵本の分析を通して、「家族になる」「家族であるということ」「家族が失われるとき」「自分を生きる」「子どもという存在」の 5 つの柱に基づき、絵本を分類し紹介した。その結果、血縁による親子関係のみではない家族の形や父親と子ども、母親と子どもそれぞれの関係を描いた絵本、子どもに対する親の思いを表現した絵本等、様々な含意をとらえることができた。

父親を描いた絵本の分析から、絵本に描かれた父親像は図 1 に示すように分類され、「日常的な父親の不在・働く父親」を描いた絵本が多いことから、家庭に不在がちである父親の実態を反映していることがうかがわれた。

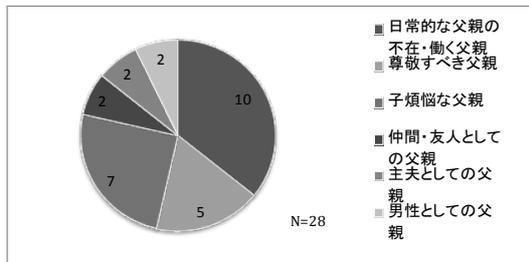


図 1 絵本に見る父親の描写

(2) 小・中学生の絵本読解力と家族描写の受容状況調査

平成 22 年度に収集した絵本の中から男女共同参画の家族生活を描いた絵本である『ママがおうちにかえってくる！』（K. バンクス文、T. ボガツキ絵、木坂涼訳、講談社、2004 年）を用いて、小学校第 5 学年と中学校第 3 学年の児童・生徒が絵本の内容についてどのように受け止めるかを質問紙により調査した。児童・生徒の発達段階によって絵本に描かれた家族関係への共感性に差異がみられ、特に第 5 学年女子児童の共感が得られた。

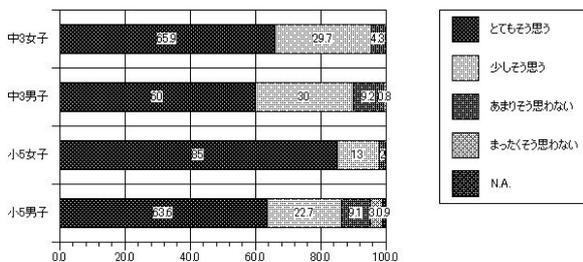


図 2 絵本の家族は楽しい家族か

調査に続いて小学校第 5 学年児童を対象と

して絵本の内容についてのディスカッションを行う授業を参与観察し、絵本を教材とする際に児童・生徒の生活現実が投影され、自分の家族や家庭生活を振り返る契機となる効果が認められた。

(3) 教員研修における絵本の教材化の試み

平成 23 年に実施した教員免許状更新講習では、絵本の教材としての可能性についての講義を受けて、用意した 20 冊の絵本を読み合い、教材としてどの教科や教育活動でどのように活用できるか話し合うというものであった。その後、グループで 1 冊を選び、具体的な授業提案を考え発表した。家庭科はもとより国語、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、人権教育といった観点から絵本を教材として使用するプランが提起され、絵本の含蓄の深さを共有できた有意義な講習となった。免許状更新講習では、家庭科のみならず、道徳や生活科などにおいても絵本を教材として子どもたちに考えさせる実践が可能であるということが、受講者たちのグループワークの結果から示唆された。講習の中で、どの教師も、大変意欲的に授業案の立案に取り組んでいた。何よりも、絵本を読み合う時にとっても楽しそうで、また意見を述べ合いながら話が弾んでいた。

絵本の活用方法も、①子ども自身がじっくり読む、②教師が読み聞かせをし、子どもたちは聴いている、③絵本の登場人物の気持ちになって、そのセリフを読み合うなど、「読む」という行為だけでもいくつかの方法が考えられた。しかしどの方法も、子どもたちが、自分の置かれている状況や経験を重ねて読む・聴くことができる点に、特徴が見られた。

絵本を「教材」とする可能性とは何かと考えたときに、まず重要なことは、その絵本が子どもの思いを重ねるフィルターとして機能し得るものかどうか、という点にほかならない。こうしたフィルターとなり得ると判断できるか否かで、その絵本が教材として用いられるかが決まってくる。絵本を読んで、ただ楽しかったり心が安らぐだけでは、「教材」にはならないだろう。「教材」というからには、授業を行う上での教師の明確な意図があり、気づかせたい・考えさせたいテーマがあるはずである。そのテーマを代弁している絵本が「教材」となり、短い文章と直接的に視覚に訴える絵の力によって、テーマを印象深く子どもたちに提示することになるだろう。絵本を教材として活用するという試みは、教師の授業づくりの幅を広げたと考えられる。

しかしその一方で、絵本を教材とすることは、一定の解釈を持って絵本を取り上げるということになる。この点に関して、「絵本は読みっぱなしが原則」（松井 1973）という言葉があるように、「解釈」を行うこと自体、

不適切なことなのかもしれないという思いもまた、立ち上がってくる。絵本を手にする子どもや大人それぞれが、その絵・言葉から感じ取る「何か」があり、その「何か」を自分の中で受け止めることが大切なかもしれない。

絵本を「教材」としようとしたときに、一定の道徳的心情や価値へと子どもたちの気づきを誘導するような授業になってはならないと考える。一つの答えに導く伏線として絵本を用いるのではなく、絵本から感じる事・受け止める自分自身の気持ちと対峙することによって、生活のありようや家族との関係を見つめなおそうという意識を喚起することができれば、それは授業として十分に意義深いものになるだろう。

(4) デジタル絵本の製作と授業研究

自分自身や家族に関する絵本を収集・分析した結果を踏まえ、教材として使用するデジタル絵本の制作を試みた。想定する授業は、中学校第1学年で実施する技術・家庭科家庭分野の「A.家族と家庭生活」におけるガイダンスの時間である。小学校における家庭科の学習を踏まえ、中学生となり成長した自分を振り返り、家族の存在や自分自身の「自立」について考える内容の授業で生徒の思考を促す手がかりとなることを考え、パワーポイントのスライドで投影される画像と言葉による「絵本」を作成した。

デジタル絵本に関する先行研究としては永田(2011)による小学校家庭科ガイダンス教材がある。「家庭科のあしあと」と題するこのデジタル絵本は、家庭生活の様々な場面で、家庭科学習が生かされ、関連していることに気づく内容となっており、子どもたち自身の探求学習として活用されることも意図されている。

それに対し、本研究において開発したデジタル絵本は、完結したストーリーとして提示し、子どもたちの思考を促すきっかけを与えようというものであり、「自立」「自分らしさ」というような抽象概念をそのまま提示し、あえて内容にはあいまいさを残した。家庭科ガイダンスとして使用するという意図は共通しているが、「自分の成長と家族」の内容の授業で取り上げられることを想定し、中学生である「今の自分」に軸足を置きながら、これまでの育ちとこれからの成長を展望するストーリーを考案した。主人公は中学生の男女生徒、制作にあたって留意した点は、以下の3点である。

- ①生徒が自分の置かれている現在の状況と重ねて読むことができるものであること
- ②家族の存在に目を向ける意識喚起となる内容であること
- ③これからの自分の生活や将来を考える契

機となるものであること

授業において、本デジタル絵本を導入に用い、生徒たちが自分自身の成長を振り返り、これからの「自立」について考えるための意識を喚起するための手がかりとすることができた。以上の4年間の研究成果は、報告冊子にまとめられ、家庭科教育関係者、家庭科教員に配布した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①堀内かおる、ジェンダー視点からみる家庭科教育の課題：男女共同参画社会に向けて、日本家庭科教育学会誌、査読無、54(4)、2012、215-225

②堀内かおる、男女共同参画の視点による絵本に描かれた家族像の分析—家庭科教材としての有用性について、横浜国立大学教育人間科学部紀要1、査読無、13巻、2011、157-153

③堀内かおる、絵本に描かれた同性カップルと子どもたちにみる「家族」像—Patricia Polacco 作品 *In Our Mothers' House* を例に、Gender and Sexuality、査読有、No.6、2011、79-91

[学会発表] (計3件)

①堀内かおる、小学生のジェンダー観を揺さぶる絵本教材の可能性—家族の仕事と役割をめぐって、日本家庭科教育学会平成22年度例会、2010年11月27日、聖心女子大学

②堀内かおる、家族的価値を問い直す教材開発の試み—同性カップルの「家族」を描いた絵本を例に、日本家庭科教育学会第53回大会、2010年7月3日、京都テルサ

③堀内かおる、家族学習教材としての絵本の可能性—父親と子どもとの関わりの視点から、日本家庭科教育学会平成21年度例会、2009年11月28日、聖心女子大学

[図書] (計1件)

堀内かおる、世界思想社、家庭科教育を学ぶ人のために、2013、200

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内 かおる (HORIUCHI KAORU)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00252841